『ガンダムＳＥＥＤ』の終末観

十津　守宏

Apocalyptism in “Gundam Seed”

Morihiro Todu

This article is an analysis of the popular,‘ Gundam Seed ’,focusing on Apocalyptism. It is certain that these descriotions of the ‘ end ’ of history Insinuate the contemporary setback of the idea of the ever progressing World.
However such Apocalyptism is difficult in taking deep root in Japan,where human life has been imbued with Orientel pantheism and the erernally returning time.
In this respect, ‘ Gundam Seed ’ calls our serious attention,as it clearly shows the Japanese Escathology.

はじめに

　この短い論考で取り扱う『ガンダムＳＥＥＤ』は、２００２年の１０月から２００３年の９月にかけての一年間、我が国において娯楽用アニメーションとしての放映されたＴＶ番組である。この作品の舞台は現行の歴史の延長上にあると考えられる近未来である。そこでは、宇宙への植民が行われ、遺伝子操作によりその身体的能力を強化した人類であるコーディネーターと現行の人類（ナチュラル）との間に根深い対立が生じており、その対立に基づいてコーディネーター側のプラント政府とナチュラル側の地球連合軍の間に生じた全世界的な戦争を舞台に作品のストーリーが展開されていく。その戦争は激化の一途をたどり、ついには両陣営間の大量殺戮兵器の応酬による殲滅戦へと移行する。その凄惨な殲滅戦の最中へ、戦争の終結と平和の回復を願う第三陣営として参加した機動兵器ガンダムを擁する主人公キラ・ヤマトが属する陣営の活躍により、プラント・地球連合両陣営の大量破壊兵器の応酬により殲滅戦は阻止され、両陣営の間にとりあえずは平和が回復されるというストーリーをこの作品は展開している。この作品に描かれたプラント・地球連合両者間の対立の構図に、我々は政治的イデオロギーや帝国主義的覇権主義に基づく国家間の対立から生じる冷戦終結以前の戦争のあり方ではなく、人種や宗教対立などに根ざしたポスト冷戦期における紛争のそれを認めることは容易であろう。即ちこの作品の世界観には現代の世相が色濃く映し出されているのである。更に、この作品の随所には、ユダヤ・キリスト教の黙示文学的終末論的モティーフを認めることが出来る。その終末論的モティーフは単なる表面的な装飾に止まることなく、この作品のストーリー全体を貫くライト・モティーフとして機能しており、結末において辛うじて避けることが出来たものの、スト

ーリーは人間の歴史の終りへと導かれていくのである。今回の論考では、この作品における終末論が単なる装飾に止まらず明確に終末論として理念化されたものであることを跡付けていくとともに、そのプロセスを通してユダヤ・キリスト教の黙示文学的終末論――より精密に述べるのであればそれはグノーシス主義への更なる深い傾斜を示すものであるが――が、この作品において如何に受容されているかを明らかにすることを通して帰納的に導き出される日本人の終末観について論述したい。

第一章　この作品におけるユダヤ・キリスト教の終末論的モティーフ

この作品の終局（クライマックス）では、種としての人間そのものを滅ぼしてしまうような大量破壊兵器、核ミサイルやジェネシス（創世記という名前を持つ巨大なガンマ線レーザー砲）の応酬が展開される。この光景そのものはまさしく黙示文学が描き出す終末の光景そのものである。紛争の一方の側であるナチュラルから構成される地球連合軍は大量の核ミサイルをコーディネーターが居住するプラント（スペースコロニー群）殲滅のために使用し、一方のコーディネーターの側は前述の創世記という名前を持つ巨大なガンマ線レーザー砲を戦線に投入し、地球そのものに対してですらこの兵器を使用しようと試みるのである。コーディネーター側の指導者はジェネシスの第一射に際して、「この一撃が我らコーディネーターの創世の光とならんことを」と絶叫する。このことからも作品中のこのガンマ線レーザー砲につけられたジェネシスという名称がユダヤ・キリスト教的意味において用いられていることは明らかである。黙示文学的二元論において、古き世の終焉が新しい世界の始まりであるように、ナチュラルの殲滅そのものが新しい世界の創造となるのである。

また、そのクライマックスを構成する各話のサブタイトルには、「怒りの日」「終末の光」といったユダヤ・キリスト教的終末論からの影響を明確に見出すことが出来るタイトルが用いられている。「怒りの日」は改めて述べるまでもなく、ユダヤ・キリスト教の伝統において終末の時を指す言葉である。

ストーリー中で、ナチュラル・コーディネーター両陣営の間で暗躍し対立を煽り、自らの呪われた出生のゆえに人類そのものを滅亡へと導こうとするラウル・クルーゼは、「ジェネシス」の発射により焼き尽くされる地球上の情景を想起して、「人が数多持つ預言の日」とも述べる。この「預言の日」とは、黙示文学の担い手であった著名な預言者達が夢見ていた古き世の終わりの日のことに他ならない。この言葉もまたユダヤ・キリスト教の終末論の文脈のもとで用いられているのである。

このようにこの作品においては、随所にユダヤ・キリスト教の終末論的モティーフを見出すことが出来る。

そして、この随所に見出される終末論的モティーフは単なる終末論的モティーフとしての装飾でなく、この世の終わりとして明確に理念化され、系統立てて用いられていることは明らかである。コーディネーター陣営の指導者が語っているように、旧来の人類を滅ぼすべく準備された巨大レーザー砲「ジェネシス」は、新世界の「創世の光」であり、その「ジェネシス」が引き起こす破滅的破壊は「人が数多持つ預言の日」と作品中では語られているからである。それは、大量破壊兵器の応酬を以って描かれる作品のクライマックス

の情景が、単にユダヤ・キリスト教の終末論的モティーフによって装飾されているのではなく、ユダヤ・キリスト教が求めてきた神の歴史に対する介入に引き起こされる宇宙的天変地異を伴うこの世の終わりというモティーフが、核ミサイルや「ジェネシス」といった近未来的な大量破壊兵器の応酬という現代的モティーフによって再解釈されていることを示しているのである。

加えて、この作品における終末志向というものは、作品全体に満ちている進歩信仰への否定によって補強される。コーディネーター（プラント側）とナチュラル（地球連合軍）の対立を煽り、両者をともに滅亡へと導こうと企てるラウル・クルーゼの作品中における以下に引用する台詞からは、この傾向を如実に認めることが出来る。

「知りたがり、欲しがり、やがてそれが何のためだったかも忘れ、命を大事と言いながら、もてあそび、殺しあう。何を知ったとて、何を手にしたとて変わらない。最高だな、人は。そして、妬み憎み殺しあうのさ。」(第４５話「開く扉」より)

「そしてこの世界は終わる。果てしなき欲望の世界は。」(第４５話「開く扉」より)

「私は知る。自らが育てた闇に食われて人は滅ぶ」（第４９話「終末の光」より）

「憎しみの目と心と引き金をひく指しか持たぬ者達の世界で何を信じる？何故信じる？」（第５０話「終わらない明日へ」）

「正義と信じ、分からぬと逃げ、聞かず、その果ての終局だ。最早止める術などない。そして、滅ぶ。人は滅ぶべくしてな。」（第５０話「終わらない明日へ」）

これらの言葉からは、明確な進歩信仰の否定を読み取ることは容易であろう。ここでは、人間の世界の終焉たる終末の到来は人間の業の結果であり、その歴史の歩みの必然的結果として把握されていることは明らかであるからである。なぜなら、人間の世界は「果てしなき欲望の世界」であり、また人は「何を手にしたとて変わらない」存在であり、そして「自らが育てた闇に食われて」人は、「滅ぶべくして」、「滅ぶ」からである。ここには１９世紀における進化論の発明以降、提唱されてきた人間の歴史の内在的発展の結果として現行の人間の歴史の歩みの延長線上に現出するユートピアという象が完全に否定されている。このユートピアの否定という志向は、この作品の紛争の構図に、先に述べたように帝国主義的覇権戦争ではなく、ポスト冷戦期における民族・人種・宗教紛争の構図からの影響を受けていることを我々が見出すことが出来るのと同様に、明らかに今日における反歴史主義的傾向を示す歴史的現実——全世界的規模で進行する生態系の破壊や地球温暖化問題に代表される環境問題、終わりなき宗教紛争やテロと武力の応酬などに代表される——と関連付けられるものである。即ち、この作品における進歩信仰の否定と終末志向は我々が今日経験している歴史的現実の産物なのである。ユダヤ・キリスト教における黙示文学の発生は、明らかにイスラエルの民が歴史的現実の中で出会うこととなった歴史的現実と関連していると言われている [1)]。同様に現代における歴史主義の破綻とその廃墟の中から産まれたこの作品における終末志向は、この意味において鑑みるのであれば、現代版の黙示文学であるとも呼び得るものなのである。

第二章　この作品における終末論の本質とその展開

前章で考察したように、この作品にはユダヤ・キリスト教の終末論的モティーフを数多く見出すことが出来る。そして、同様にこの作品における終末論は、単なる終末論的モティーフの借用に止まらず、本質においても終末論そのものとしての機能を果たしているのである。一方で、終末論を構成するにあたって必要な要素の「死と再生」のうち、「再生」については明確に理念化されてもいなければ、触れられてもいない。終末は新しい世界への扉ではなく、単なる罪に穢れたこの世の終わりであり、人間の業を報いとして位置づけられている。ここに滅びに伴う再生について語ることのない、「約束の地」も「神の国」も存在し得ない終末論の展開を我々は見出すことになる。しかし、かの『希望の神学』の作者であるＪ・モルトマンがいみじくも指摘しているように破局ばかりを強調する終末論は終局主義というべきものであって、真なる意味においての終末論ではない [2)]。では、この作品における終末論とは現世・現実否定への傾斜を示しているという意味においては黙示文学的終末論への接近を示すものであっても、再生や新世界について語ることがない「神なき時代の黙示録」なのであろうか？

確かに、この作品の終末論というものは、現世・現実否定という意味においては黙示文学のそれと酷似しているものであるが、作品が予感させる終局の虚無的性格——万物の終焉として、穢れた世界と人間の業からの開放の意味を込めたものとしての——を考慮に入れるのであれば、黙示文学のそれよりはむしろグノーシス主義のそれへのより明確な傾斜を示している。この傾向は、作中のラウル・クルーゼの「まだ苦しみたいか？いつかはやがていつかはと、そんな甘い夢に踊らされ、一体どれ程の時を戦い続けてきた？（第５０話「終わらない明日へ」より)」という作品中の言葉から明らかになるように、世界の終わりそのものが罪や穢れや過ちの連鎖からの開放として把握されていることからも明らかである。この作品の終末論が志向するものは、終末を経て再生される新世界ではなく古き穢れた世界の滅亡であり、その滅亡を通しての人間の業と過ちの連鎖からの存在の開放そのものなのである。そしてこの志向は、まさしくグノーシス主義そのものへの明確な接近を示すものなのである。

グノーシス主義とは、物質界からの魂の開放と万物のはじまりへの回帰を志向する紀元前後に地中海沿岸の地域で花開いた思想的潮流である。グノーシス思想においては、人は肉体と言う牢獄に閉じ込められていると考えられている。この世界は誤った創造の産物なのである。しかし、人間の肉体という牢獄に閉じ込められている霊は本来的自己を取り戻すことにより、肉体という牢獄とこの世界を捨てて、光へと回帰することが出来るとされている。そして、この物質界に囚われている最後の光がこの世界を見捨てた時、世界は再び虚無へと崩壊していくとされている。この世界そのものは闇の力の禍々しい暴力の産物なのであり、この世界そのものが虚無へと崩壊していくその時こそ、光が決定的な勝利を祝うその時なのである。作品中では、終末の到来は「人の業」の結果であり、また「飽くなき欲望の果て」と描かれているが、それは一方で虚しくそして愚かな人間の歩みの終焉の時として、悲しい宿命を背負わされた存在からの開放の時という意味において、救済色を帯びたものとしても描写されている。ラウル・クルーゼは「ジェネシス」が放った最後の一撃に身を焼かれ絶命する瞬間に満足げな笑みを浮かべる。このことからもこの作品に

おいては、終末がもたらす「死」や世界の終焉が物質や人の業からの解放という意味においては救済論的意味づけを与えられていることは明らかである。そしてそれ故に、この作品の随所には世界の終わりに対する憧憬を色濃読み取ることが出来るのであり、その終末指向というものがライト・モティーフとして作品を貫いているのである。このことには、反歴史主義的現実を示す今日の歴史的現実が大きな影響を与えていることは疑う余地がないことは既に述べた。W・シュミットハルスが指摘しているように黙示文学においてもグノーシス思想においても、現世否定・現実否定という意味においては現存在理解というものは共有されており [3)]、そこでは、終末は究極的希望なのである。そして、この作品中の終末論がグノーシス主義的色彩の濃いものとなっていることも論理的必然である。なぜなら、荒井が指摘しているようにグノーシス主義とは歴史の先行きが見えなくなった時代や個人や集団が現実との同質性を保てなくなった（アイデンティティを喪失した）時代にこそ、通時的現象として顕在化するものであるからである [4)]。

では、このような背景のもとで我々が今日経験している歴史的現実を踏まえつつ展開されているこの作品のストーリーにおける終末論が、作品の終局においては拒否・解体されてしまったのは何故であるのだろうか。

我が国における終末論的伝統に対する先行研究と考察は、我が国における終末論的信仰とは、西洋的な劇的なこの世とかの世との二元論的転換ではなく、農耕民族的世界に裏付けされた自然の周期性との類比により育まれた穏やかな生命の周期的再生へのそれであることを指摘している [5)]。先行研究によってなされたこの指摘はこの作品が終末論の解体へと至った理由を解き明かすにあたって、重要な示唆を含むものである。この作品では、モティーフそのものは西洋の黙示文学的終末論からその多くが借用され、一方でその本質においては黙示文学的終末論や更にはグノーシス思想におけるそれへの接近を我々は見出すことが出来る。しかしながらその一方で、作品の結末においては絶望に満ちた歴史的現実からの究極的な開放であり「救済」でもある「世界の終わり」という「希望」は破棄される。この要因としては、歴史を創世から終焉まで導く人格神というユダヤ・キリスト教的神観念や歴史と世界に外在するという超越神というグノーシス主義にみられるような超越者としての神観念が、日本人のメンタリティに根付いていないものであることが、その証左として挙げられよう。黙示文学或いはグノーシス思想的希望は歴史の変革者、導き手としての或いはこの世界に外在する絶対神としての神の存在や創世から終焉・救済へと至る歴史の流れ全体の統一的把握を前提とした場合のみにおいて成立するものである。しかしながら、日本人のメンタリティの根底に流れている神観念とはアニミズム的世界観に基づく自然の人格化としての神観念であり、決して絶えることなく周期的再生を繰り返す自然の生命力に対する無意識的な信仰と畏怖の念なのである。従って、この作品においては、現行の人間の歴史的変革の可能性への絶望を作品の随所で表明しながらも、黙示文学的な宇宙的論的な破局を通しての世界の再生やグノーシス主義的な虚無への回帰と光の世界への飛翔という再生を描くことは出来ないのである。世界に対する超越者としての神観念を持ち得ていない我々日本人のメンタリティは、日々刻々と悪化する現実の中に来るべき新世界を期待することは出来ないからである。従って、最終話のサブタイトルである「終わらない明日」が希望となり、苦しく変革を期待することが出来ない現実の中でそれでも生

きていこうとすること――作品の結末では「逃げるな、生きる方が戦いだ」（第５０話「終わらない明日へ」より）と述べられていることからも推察され得るのであるが――が、「希望」となり、この作品の結末は結ばれることになるのである。

結びに代えて

この作品を以上のような考察のもとに分析していくと、作品中における終末論の理解・受容・展開そして解体のあり方というものには、今日における歴史的現実を我々がどのように把握しているかということともに、日本人に伝統的な農耕民族的な終末観――この世とかの世との排他的な二元論的な転換ではなく、かの世を共時的存在として捉え、この世の中にその存在の可能性を見出す――が色濃く表象されていることを見出すことが出来る。この作品における希望とは、人間を罪深い存在であるとみなし、滅びるべきものと主張するラウル・クルーゼに対して、「人間はそんなものじゃない」（第５０話「終わらない明日へ」より）とクルーゼの見解を否定するこの作品の主人公キラ・ヤマトの言葉にも表象されているように、黙示文学・グノーシス主義的な罪深いこの世の滅亡ではなく、この世の可能性を未だ信じようとする「終わらない明日」であるからである。

そしてこの傾向が、この作品と同様に我が国において前世紀末から今世紀初頭にかけて世界そのものの「死と再生」という終末論を作品のストーリーの中心に据えて展開された幾つかの作品においても、見出すことが出来ることは興味深い事実であるといえよう。かの宮崎駿の劇画『風の谷のナウシカ』においては、この世とかの世との二元論に基づく世界の再生という思想そのものが否定されており [6)]、また世間に一大センセーショナルを巻き起こした『新世紀エヴァンゲリオン』においては、グノーシス主義的色彩を帯びた歴史喪失を示す魂の故郷としての静的な終末論的ユートピアは主人公の自我の確立とともに崩壊してしまう [7)]。これらの作品が一様に示している思想的傾向性というものは、それらの作品のストーリーが西洋的な終末論の再解釈のモデルとして展開されていることと及びその担い手・作者が日本人であり、更には一様に同じ傾向を示していることをも考慮に入れると、宮田のミロク信仰に対する示唆に富む研究成果と同様に日本人の農耕民族的な気質に裏打ちされた終末観を象徴的に表象したものとして捉えることが出来るものなのである。

【註】

1)シュミットハルス・W『黙示文学入門』教文館，ｐ．159.
2)モルトマン・M『神の到来』新教出版社，ｐ．402.
3)シュミットハルス・W『黙示文学入門』教文館，ｐｐ．96-119.
4)荒井献『トマスのよる福音書』講談社，ｐ．103.
5)宮田登『ミロク信仰の研究』未来社，ｐｐ．318-333.
6)当該作品に関する詳細な分析については拙稿「新世紀エヴァンゲリオンの終末観――終末論的伝統の「東」と「西」との比較文化論的考察――」『鈴鹿国際大学短期大学部紀要　第２３巻』ｐｐ.7-17 を参照されたい。
7)当該作品に関する詳細な分析については拙稿「歴史神学と汎神論的世界観の対決」『世間話研究　第９号』ｐｐ．70-85 を参照されたい。